軽口を打てば響く友人の存在…

今夕の短時間内の、遠方にいる約３０年来の友人（携帯メール）との会話。

友人：久しぶりに青い海。（注：仕事上の）渋滞はずっと。心発作も久しぶり。
　　そのまま逝ってもいいのにねぇ～　まだ楽できないのね～。

私：そんなに急がなくていい、順番があるもの。
　　僕が天国で、貴女を迎える準備してからでいいからね。

友人：あいかわらず、励ましじょうずね。貴方も私も天国なの～？

私：何？死んでまで僕と係わり合うのは嫌なの？　じゃあ、貴女はお好きな方へ。

友人：ほ～んと、上手ねぇ～　笑っちゃいましたよ。貴方は天国。私は？
　　だれが決めるのかしら。お付き合いは嫌な訳ないでしょ！！
　　（注；私の）追っかけしてるんだもの！

私：いずれにしても、長い人類の歴史で未だかって、あの世は嫌な所だったからと帰ってきた人はいない。よほど、あの世はいいところなのかなあ。

友人：魅力的な言葉ね。死ぬ程退屈という言葉があるよ。仲間との苦しさ、悲しさ、哀れさ…生きてる実感ともね。いづれにしても、不完全な人どうし、分かり合えなくて当然なの。でも、悲しいと涙し、可笑いければわらう。所詮は人以外ではないのだわ。
　　月にも花にも虫にもなれない…。逝けたら、阿部さんをさがすわ。

私：探さなくてもいい。僕から昇りを立てて、かつ、拡声器で出迎えてあげるからね。
　だから、目か耳か、どちらかは大丈夫なようにしておくこと！

友人：了解！！　たのんだね。

携帯メールだけに長々と書く訳にいかず…。それにしても、このように打てば響く、軽口を交わせる友人の存在は、頼もしくもあり、私には貴重な限り。

また、深刻な内容程、こうしたブラック・ユーモアがいいかもね。

（2004 年 11 月 22 日　記）